

下ST), 試作NiTiポスト(以下NiTi)ならびに試作FRPポスト(以下FRP)を用いた。また, 支持力に寄与しない対照としてポリプロピレンポイント(以下PP)を用いた。ポストの合着にはグラスアイオノマー系セメントを用いた。ヒト歯は歯冠を切断, 根管形成を修了した根を任意に10本ずつ4つの築造様式, また, 構造的には2条件として支台歯を製作した。継続型ポスト群: ①ST+CR, ②FRP+CR, 一貫型ポスト群: ③NiTi+CR, ④PP+CR。試作FRPはグラスファイバー+ポリエステル樹脂, 曲げ弾性係数は31.53GPa。抗折強さは試験体を水平面に対し45°の傾きで測定用ジグに固定しクロスヘッドスピード5mm/minで測定した。

(結果・考察) 抗折強さは平均でST支台は33.26MPa, FRP支台は24.50MPa, NiTi支台は21.81MPa, PP支台は11.21MPaであった。破壊様式はポストが比較的柔軟なNiTi支台ならびにPP支台では根破壊が少なく, 剛性の高いST支台およびFRP支台では根破壊(混合破壊)の多い傾向が観察された。FRP支台では全例根破壊を伴う混合破壊が生じ, 根破壊はポストの位置に一致していた。これはコンポジットレジンと歯質の接着ならびにFRPとの接着が比較的良好であり, 接着界面に生じた亀裂がポストにより垂直性に変化したと推察された。また, 1例歯根の凝集破壊が観察され支台と根が一体化されたと考えられた。NiTi支台は界面破壊が多く, PP支台はほとんどが界面破壊で根破壊は小規模であった。根面有効接着面積と抗折強さの相関性はいずれの様式も非常に弱く, 抗折強さの大小は根部歯質の状態や接着操作の影響が大きいと推察された。ST支台は抗折強さが大きい傾向があったがポストの抗力と考えられた。

(結論) 静的加重による支台歯の破壊は根破壊を伴う傾向があった。FRP支台においても根破壊がみられ, 亀裂は多くの場合ポストの位置に一致していた。NiTi支台はFRP支台と同程度の抗折強さを示しt検定において有意差を認めなかった。

14) 院内生アンケートによるシミュレーション実習の評価

—平成14年度と平成15年度との比較—

○志賀 博信, 清野 晃孝, 釜田 朗, 田代 俊男
影山 勝保, 齋藤 高弘¹, 鎌田 政善
(奥羽大・歯・診療科学, 奥羽大・歯・歯科保存¹)

(目的) 我々は, 平成11年度から臨床実習の中で実施しているシミュレーション実習について, 各年度末に院内生に無記名のアンケート調査を行い, その結果から実習内容を見直すことで院内生の意欲・満足度が向上してきたことを本学会で報告してきた。そこで今回は, さらなる実習内容の充実を図ることを目的として, 平成14年度と15年度との比較を行った。

(方法) 平成14年度ならびに平成15年度の院内生を対象として, 25項目および26項目についてV.A.S法によるアンケート調査を実施し, その結果を比較・検討して問題点を抽出し, 改善点を提示した。

(結果および考察) ほとんどのアンケートの項目で平成15年度は, 平成14年度と比較して高い評価を受けた。その原因として, ①15年度から実習に導入したOSCEのための実習, すなわちプレクリを行うことにより各学生の学習意欲が向上したこと②半日実習を一日実習にすることにより, 実習に集中できる環境を整えたこと③各医局員が問題点を把握し改善点を具体的に実行したこと等が考えられるが, 実習時間やDent Simについては, さらなる改善が必要であると考えられた。平成16年度の改善点として, 保存修復学系実習では, 実習時間が少ないことから補充日を設けることにした。歯内療法学系実習では, 下顎右側第1大臼歯の根管治療を取り入れることにした。冠橋義歯学系実習では, 補充日を設けることと, 実習書の画像を見やすくした。有床義歯学系実習では, 実習を4週間連続で行い, 翌週までの期間を有効に利用し, 一連の臨床操作を集中して行うこととした。今後も問題点を抽出して, 効率よいシミュレーション実習を構築していく所存である。